

F. A. ハイエクと暗黙知の関連性

今池 康人（大阪府立大学）

1. はじめに

F. A. ハイエクについての研究を行ううえで、彼のルール論は非常に重要なものである。近年、ハイエクの政治・経済論におけるルール論の意義については、様々な議論が行われている。これまで、ハイエクのルール論を研究する過程で、ハイエクとともに M. ポランニーの暗黙知概念について注目してきた。ポランニーの名はハイエク研究において度々登場し、暗黙知とハイエクの思想の関係もまた指摘されている。そして、この暗黙知に関しては、経営学の領域においても注目されることが多い。たとえば野中（1996）は、暗黙知を経営学に導入し、言語化されない暗黙知が様々な面で大きな役割を示すことを明らかにした。しかし、この野中の述べる暗黙知はポランニーの暗黙知とは異なるものとなっている。本発表では、ハイエクの知識論について検討するとともに、ポランニー・野中の暗黙知との比較を行い、ハイエク知識論の重要性を明らかにする。また、ハイエクとポランニーを結び付ける要素として自由論が挙げられる。しかし、本稿では彼らの知識論を中心に検討するため、2人の自由論の比較・検討は行わない。

2. ポランニーの暗黙知

ハイエクの知識論について検討する前に、まず暗黙知について簡潔にまとめておく。暗黙知とは、簡単に表すと自分が知っていなくても身体が覚えている知識である。暗黙知の一般的な例としては、ある人の顔を他の顔と区別することができるが、どのようにしてそれを認知できるか説明できないこと、あるいは、車を運転するとき、どうしてうまく運転できるのか説明できないが、体が覚えているため運転することができることなどがあげられる。ポランニーは暗黙知の基本的構造を説明する際、暗黙知を第1項（近接項）と第2項（遠隔項）の2つに分けて説明している。人間の顔の識別で考えると、目、鼻、口などが近接項、顔の識別が遠隔項である。我々は顔の諸細目を手掛かりに顔の識別を行っているが、諸細目に意識を向けることはない。顔の識別ができるから、諸細目について感知していることが理解できる。すなわち、第1項についての知識は暗黙的なものにとどまっている。そして、暗黙知においても1つ重要なことは、それが表出伝達不可能な知識であることである。暗黙知はあくまで言表不可能な知識であり、言葉で表すことはできない。この点について大崎（2009）は、「自分が独自に身に付けた知識や技能の中には簡単には他人に説明・伝達できないものがある。個々の『暗黙知』は個人に特有なものであり、他人に伝達して共有することはまず不可能である」（大崎

(2009)、29 頁) と説明している。暗黙知とは、経験に基づく要素が含まれており、簡単に真似できるものではない。

3. 野中の暗黙知

野中は『知識創造の方法論』において、経営学に暗黙知概念を取り入れた。しかし、経営学における暗黙知は、ポランニーの暗黙知と異なる性質を持つ。これらにおけるもっとも重要な違いは、暗黙知の共有に関してである。前述した通り、ポランニーの暗黙知は他者との伝達・共有が不可能であるのに対し、野中の暗黙知では、暗黙知の共有化が重要な要素となっている。

野中は、知識を個人的で主観的な知識(暗黙知)と社会的で客観的な知識(形式知)の2つに分類する。彼の主張では、暗黙知は、知っていても言葉には変換できない経験的知識であり、言葉で表すことは難しい。対して、形式知は暗黙知を言葉や体系に表したものとしている。知識とは暗黙知と形式知の複合体であり、暗黙知と形式知が交互に作用し知識の創造が行われる。この知識創造のプロセスを、野中は SECI モデルと呼んでいる。この SECI モデルは4つのモードからなっている。順に①他者との暗黙知の共有、獲得を行う共同化、②暗黙知から形式知を創造する表出化、③個別の形式知を体系的に結び付け、新たな形式知を生み出す連結化、④形式知を自身のものとして身体に取り入れ暗黙知とする内面化の4つである。そして、これら4つのモードを螺旋状に発展していくように実践していくことの重要性を野中は述べている。このことからわかるように野中の暗黙知は言語などによる表出や他者への伝達・共有を前提とし、明らかにポランニーの暗黙知とは異なっている。

4. ハイエクの知識論

ポランニー・野中両名とは異なり、ハイエクは自身の理論において暗黙知についてはほとんど述べていない。しかし、彼の理論の様々な部分において暗黙性が見られ、ポランニーからの影響が指摘されている。本稿では特にハイエクの知識論を中心に検討する。

ハイエクは1945年に発表した論文「社会における知識の利用」において個人の持つ知識について論じている。この論文において、ハイエクは知識を2つに区別している。1つは特定の個人の処理に任せられる可能性の高い種類の知識であり、もう1つは適切に選ばれた専門家たちからなる当局が所有することをわれわれが大きな信頼をもって期待しうるような種類の知識である。前者の知識は科学的とは言えないが、この「ある時と場所における特定の状況についての知識」は確かに存在し、各個人はそれを有益に使用する独特の方法を持つ。フリートウッド(1995)はこの「ある時と場所における特定の状況についての知識」について検討し、暗黙知との関連性を指摘している。

フリーウッドはこの「状況についての知識」のなかに埋め込まれている知識として次の3つをあげている。第一に、一連の公式の諸制度の内部に組み込まれている知識であり、この知識は認識する人から独立している。この知識を含む制度には教育や訓練、株式市場報告書、図書館、あらゆるメディアなどが含まれる。第二に、じかに接している環境についての知識である。これは、他の主体によって保有される知識であったり、個人的関係に組み込まれている知識であったりする。この知識には、不動産ブローカーやさや商人など他人に知られていない瞬時の状況についての特殊な知識が例に出されている。フリーウッドは、これら2つをまとめて「非暗黙的な局所的知識」とよんでいる。この知識の特徴として、諸主体は最初からこの知識を所持しているわけではないこと、譲渡・移転が可能なことなどが挙げられる。そして、これら2つとは別に、第三の暗黙のうちに保持される知識が存在する。この暗黙知の特徴として、諸主体はそれを入手する必要のなく、すでに所有していること、認識する人に依存しているため譲渡不可能であり移転不可能であることなどが挙げられる。そして、ハイエクの暗黙知の重要な点に社会的ルールとの関係がある。ハイエクは諸主体が社会的行為をうまく開始できるのは、諸主体がルールを明文化できず、論述内容の知識を持っていなくても、ルールに従ってどう行為するかという遂行方法の知識を持っていれば充分である、と考えている。

5. 3者の比較

これまで、3者の知識論について検討してきた。彼らは皆、暗黙の知識について論じているが、それぞれの意味するところは異なっている。

3者の暗黙知の性質はそれぞれ異なる特徴を持つ。ポランニーの暗黙知は言表・伝達不可能であるのに対し、野中の暗黙知ではそれが可能である。フリーウッドが述べた、ハイエクの暗黙知は、一見、ポランニーの暗黙知と同じように見える。しかし、フリーウッドは、ポランニーは生理学的な行為に関心を持っていたのに対し、ハイエクは社会的な活動や過程を含むように研究範囲を広げてきたことを指摘し、その点でポランニーを越えたと述べている。元物理学者であるポランニーが知識論を研究するにおいて、人間の知覚のメカニズムに焦点を当てたのに対し、ハイエクは知識論を論じる時も常に社会とのつながりを念頭に置いた。そして、野中は日本企業の知識創造を論じるにおいて、暗黙知を使用した。彼らの暗黙知の差異は、このような彼らの研究における立ち位置の違いが影響していると考えられる。暗黙知概念はポランニーが創出したものだが彼に影響を受けたハイエク・野中は共に暗黙知概念を独自に発展させた。

次に、このハイエク・野中両名の知識論について検討したい。ハイエクは

知識を個人の知識と専門家の知識に分け、野中は形式知と暗黙知に分けた。また、フリーウッドは個人の知識を暗黙知と非暗黙的な局所的知識に区別した。しかし、前述した通り2人の暗黙知は異なるものである。むしろ、野中の暗黙知は知らず知らずのうちに持っているものではあるが、明文化でき、伝達可能であるという点では、ハイエクの非暗黙的な局所的知識に含まれるものである。ハイエクの非暗黙知に含まれる、じかに接している環境についての知識は、明らかに職業生活や仕事の習得を意図している。このように、野中の暗黙知は暗黙知ではなく、むしろ、非暗黙的な特定の状況に関する知識と見ることができる。

6. むすび

本発表ではハイエクの知識論ならびに、ポランニー・野中の暗黙知について検討した。彼らの議論は知識の暗黙性を考慮している点では共通しているが、その内容は独自の個性を持ち、大きく異なるものである。ポランニーの暗黙知が生理学的要素を重視し、野中の暗黙知が組織の知識想像を念頭においているのに対し、ハイエクの知識論はそれら両方を含んだものになっている。ハイエクの議論では、彼の自由論が最も注目される点であろうが、彼の知識論は企業経営を検討するうえでの材料ともなるものであり、軽視することの出来ない重要な要素である。

<参考文献>

- Fleetwood, Steve (1995), *Hayek's Political Economy: The Socio-Economic of Order*, London, Routledge, 1995. 佐々木憲介・西部忠・原伸子訳『ハイエクのポリティカルエコノミー 秩序の社会経済学』、法政大学出版局、2006
- Hayek, F. A. (1945), 'The Use of Knowledge in Society', *American Economic Review* 35 (4), 田中真晴訳「社会における知識の利用」 嘉治元郎・佐代訳『個人主義と経済秩序』、春秋社、2008. 所収.
- Polanyi, Michael (1966), *The Tacit Dimension*, Anchor Books Doubleday & Company, Inc. New York, 1966. 佐藤敬三訳『暗黙知の次元』、紀伊国屋書店
- 大崎正瑠(2009)、「暗黙知を理解する」、『東京経済大学人文自然科学論集』、第127号、2009.
- 野中郁次郎・竹内弘高(1996)、梅本勝博訳、『知識想像企業』、東洋経済新報社、1996.

正式な文献リストは、報告当日配布いたします。